攻略対象その３の騎士団長令息ですが運命の恋なら間に合ってます

［登場人物紹介］

Characters



リンジー

アルバートの（偽装）婚約者。
おっとりふわふわした
優しげな令嬢だが、
芯は非常に強い。



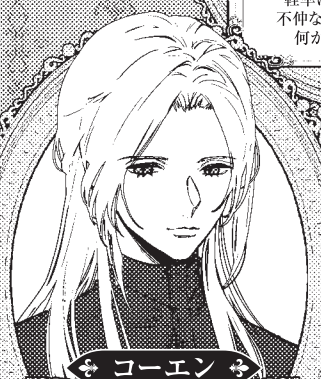
アンネマリー

ロベルタの（偽装）婚約者。
凛々しく賢い令嬢で、
幼馴染のリンジーが大好き。



エルンスト

第二王子で、
アルバートの護衛対象。
軽率に振る舞いながらも
不仲な兄や王位のことなど
何かと苦労している。



コーエン

わけあって
教会に入れられた王弟。
何か企みがある
様子だが……



エマ

自分をゲームヒロインと信じる
男爵令嬢。
あまり賢くなく、
不審な行動が多い。



ロベルタ

ホーク侯爵家の次男。
アルバートの幼馴染で
彼と一緒にいるためなら
手段を選ばないところがある
執着系美少年。



アルバート

ミケルセン侯爵家の次男。
生真面目で少々苦労性な
愛され美少年。
護衛対象のエルンストに
振り回され気味。

プロローグ

王宮の美しい庭園で子供たちの集まるお茶会が催されている。今年十歳になった第二王子エルンスト殿下の婚約者とご学友を選ぶためのお茶会だ。

騎士団長の次男であり侯爵家で殿下と同じ年齢である俺は、家格や年齢からご学友に選ばれることがほぼ決まっているのだろう。初めから上座の円卓に席が用意されている。隣には父の親友の息子で、同じく侯爵家、そして宰相の次男で同じ歳のロベルタの席もある。きっと、彼も俺と同じようにご学友候補なのだろう。

ロベルタの両親とうちの両親は学園時代からの友人らしく、とても仲が良い。なので、同じ年に生まれた俺たちは、貴族の子供が外出を許される五歳になると同時に引き合わされた。

その顔合わせは、俺の家であるミケルセン侯爵家の王都邸のコンサバトリーで行われた。冬の柔らかな日が射し込む部屋に、金髪をきっちりと撫でつけた厳格そうなホーク侯爵に連れられて現れたロベルタを初めて見た時、俺は人形が動いているのかと思って、何度か瞬きしてしまった。

父親に似た黒い髪の毛に赤い瞳という俺の強い色彩とは正反対の、肩まで伸びた柔らかく波打つ

優しい色合いの金色の髪の毛と、蜂蜜を溶かし込んだような、光によって濃い金色にも琥珀色にも見える不思議な色合いの瞳。男女の区別も見ただけではわからない可愛らしい天使のような見た目なのに、表情は硬くて淡く色づいた唇がギュッと結ばれていた。

後から思えば、ロベルタはきっと初めての外出に緊張していたのだろう。

対して俺は、初対面の同じ歳の子供にはしゃいで、緊張し困惑するロベルタの手を取って冬の庭を歩き回り、お気に入りの秘密基地だった温室に連れ込んで、とっておきの冬いちごを食べさせたり、覚えたての魔法で出した水を飲ませたり好き放題やった記憶がある。ロベルタはというと、冬いちごの酸っぱさに目を丸くしたり、俺がもう魔法を使えるようになっていることに驚いたりとずっと目を白黒させていた。五歳の自分にとって精一杯のもてなしをした……つもりではあったけれど、普通の貴族の子供がするようなことではなかったかもしれない。しかし、その歓迎をロベルタはお気に召したのか、俺に懐いて毎日のようにやってくるようになった。

いや、『懐いた』というのはかなり婉曲的な表現かもしれない。

ロベルタは俺に執着した。

ホーク侯爵は、部屋でいつも本を読んでいたロベルタが俺に影響されて少しは外に出て身体を動かすようになればいい、と考えていたようだが、この状況は計算違いだろう。ちょっと引くくらいに、俺にべったりになった。

毎日ミケルセン邸に遊びに来て、いつも手を繋ぐ。おやつのクッキーを俺の口に運ぶ。昼寝する時も同じベッドで俺に抱きついて眠る。帰りの馬車が迎えに来ても、帰りたくないと駄々をこねる。

挙げ句の果てには、「アルバートと結婚する」と言い出した。

「僕は将来、アルバートと結婚する！」

と、ロベルタが言い始めた頃は両親たちも子供の可愛らしい戯れだと微笑ましく見ていたけれど、何年経っても変わらないロベルタに次第に焦りを覚えたようで、「男の子同士は結婚できないんだぞ？」だの、「アルバートはお母様に似ていて、とても綺麗だけど男の子なのよ？」だの言って、なんとか諦めさせようとし始めた。けれど、ロベルタは全く変わらなかった。

そんなロベルタに対して俺はといえば、とっくの昔に絆されていた。

天使のように可愛らしい相手に、真っ直ぐに「好き」と言われれば嬉しいし、手を繋ぎたがるのも可愛い。何より、初対面の時の印象が強くて、俺が手を引いてやらなければ！　という、庇護欲というか……、子供らしい『お兄さんぶりたい』という気持ちもあった。そして他の子供たちと交流するようになってもロベルタが自分だけに執着しているというのは、子供心に優越感が満たされた。

その、子供らしい優越感がいつの間に仄かな執着に変わったのかは俺にはわからない。天使のような外見ながらも、父親譲りの意外と計算高いところがあるロベルタなので、きっと誘導されていたのだろうと思うけれど、そうだとしても嫌な気はしないので問題ない。

初めて出会った時には、宗教画の天使のように可愛らしかったロベルタは、十歳になる頃には背

も伸びて凛々しい少年に成長した。本よりも重たいものを持ったことがなさそうな柔らかかった手のひらも、俺と一緒に剣術の稽古をするようになって、まめができて硬くなった。魔法の訓練では魔力切れで倒れるまで基礎魔法を繰り返していた。ホーク侯爵家は文官系の家なので剣の稽古なんて必要ないし、魔法だっていざという時は助けが来るまで時間稼ぎができる程度に使えればいいのに、それでも弱音を吐かずに剣を振るい魔法を練習するロベルタが隣にいたから、俺も厳しい稽古を頑張れた。

二人でいるのが当たり前で、だからお互いの両親が俺たちの婚約について口にし始めたのを聞いて不安になった。男同士で結婚できないことはわかっていたけれど、ロベルタの一番が自分以外になってしまうなんて想像もしていなかったから。

そんな俺に、ロベルタは優しい顔で「僕に任せておいて。絶対に悪いようにはしないから。大人になっても僕はアルバートのものだし、アルバートは僕のものだよ」と言って、熱を帯びた瞳でじっと俺を見て、指先を伸ばしてそっと俺の頬を撫でた。

◆　◆　◆

美しい庭園に令嬢たちのドレスが眩しい。それぞれは可愛らしいのだと思うけれど、これだけ集まるとごちゃごちゃとしていて妙な圧力を感じてしまう。

目の前の紅茶を口にしながらそっとため息をつくと、隣の席から気遣うような視線が向けられた。肩甲骨のあたりまで伸びた柔らかく波打つ金髪が揺れて、蜂蜜色の瞳が心配そうに細められる。

「疲れた？」

「いや、まだ始まったばかりだし」

「そう、……あの、向かいの赤い髪の令嬢」

ロベルタがさりげなく向けた視線の先には、少し勝気そうな顔をした、緑色のドレスを着た赤い髪の少女が隣に座った少女と話をしている姿があった。

「彼女がどうかしたのか？」

「後で話しかけてみようと思う」

「そうなのか？　リード侯爵家の嫡女のアンネマリー嬢だよな」

「うん、そう。そして隣がオールドマン伯爵家の嫡女のリンジー嬢。見るに二人はお互いに淡い恋心を抱いているみたいだ」

にっこり笑いながら、ロベルタは肩にかかる自分の髪の毛を背に流した。

言われてそっと観察してみると、確かにアンネマリー嬢のリンジー嬢を見つめる翡翠色の瞳には隠し切れない執着の色が見える。対してリンジー嬢はふわふわした栗色の髪の毛と同様にふんわりとしていて、自分から積極的に働きかけはしないけれどアンネマリー嬢を丸ごと受け入れているような空気がある。

「僕は、アンネマリー嬢と婚約しようと思う。アルバートはリンジー嬢と婚約するのはどうかな？

リード家もオールドマン家も婿を探しているし、大きな商会を持ってるからね。リード家の貿易、オールドマン家の扱う武具や軍馬は僕たちの家と相性がいい。家格も合うし利益も見込める。親たちも納得しやすいし、多分、お互いに上手く利用できるよ」

そう言って自分だけでなく俺の将来までさらっと勝手に、当たり前のように決めてしまったロベルタは、とても綺麗な顔で笑った。

そしてその後、声をかけた令嬢二人とは相性も悪くなさそうだったし、意外と話も弾んだ。何より向こうもロベルタの話に乗り気だったので、俺たちは婚約を申し込むことを約束して別れた。

「父上、僕はリード家のアンネマリー嬢に婚約を申し込もうと思います」

お茶会が終わって、いつものようにミケルセン邸に集まっての団欒（だんらん）は、ロベルタの言葉で混乱を極めた。

「えっ⁉　アルバートは⁉　アルバートのことはもう良いの⁉」

母上、その言い方は俺が捨てられたみたいに聞こえるので言葉を選んでほしい。

「もちろんアルバートとはこれからもずっと僕のいちばんの親友です。でも、アンネマリー嬢はとても聡明で話をしていて楽しかったのです。アルバート以外に選ぶなら彼女しかいないと思いました」

それを聞いたロベルタの両親はテーブルに膝を打ちつけるのも構わず、勢いよくソファから立ち上がった。

「あなた！　打診を！　早く打診を！　今日のお茶会で他の家も目をつけたかもしれないわ！　アンネマリー嬢の婚約が決まる前に早く！」

「これを逃したらロベルタは結婚しないかもしれんからな。急いでリード家に釣り書きを送る。悪いがハインリヒ、ヘルミーネ殿、今日はこれで！」

父と母に申し訳程度の断りを入れて、慌ただしく足早に去っていくホーク夫妻。それをソファに座ったまま見送る自分の父に、俺も告げる。

「俺もオールドマン家のリンジー嬢と――――」

言いかけたところで、ぐるりとこちらに向き直った父が俺の肩をガッチリと掴んで吠えた。

「よし、任せろ！　オールドマンなら知らん仲でもない。アルバートの婚約はキッチリと纏（まと）めてやるからな！」

そうして、俺たち四人の偽装婚約が決まったのだった。

学園入学と謎の女子学生

「やったわ！　ついに恋キラの入学式だわ！」

入学式の朝、校舎裏の庭園に叫び声が響いた。

「……一体何の声？」
あまりにも淑女らしからぬ叫びだったからだろう。アンネマリー嬢がいかにも不快です、と眉間に皺を寄せて言う。
「これでついにイケメンにモテモテな逆ハーライフに突入よ！」
また叫び声がした。どうやら俺たちがいる四阿から少し離れた場所で叫んでいるようだ。
「エルンストでしょ～！　ロベルタでしょ～！　アルバートでしょ～！　サリエル、ウリエルでしょ～！　そしてコーエン・トッド様！」
突然名前を連呼し始めたその中に自分たちのものがあって、思わずギョッとしてロベルタと顔を見合わせる。子供の頃は肩より少し長い程度だったロベルタの柔らかな金色の癖のある髪の毛は、今では背の半ばまで伸びていて、母上に似た俺とは違い上品な柔らかさを残しつつも精悍な顔つきに成長していた。
「あら、アルバート様、お知り合いですの？」
リンジー嬢が栗色の髪の毛を揺らしておっとりと首を傾げるのに、慌てて首を横に振る。
「全く心当たりがない」
入学式の早朝に校舎裏で叫ぶような令嬢と知り合いだなどと誤解されるのは勘弁してほしい。
「エルンストとはエルンスト殿下のことか？　ウリエル、サリエルは魔術師団長のところの双子だろ？　コーエン・トッドといえば王弟殿下以外にあり得ないけど……、王弟殿下を除けば今年入学の高位貴族の子弟ばかりだな」
「王弟殿下も学園内の教会で司祭をしてるわね」
「なんだか不穏ですわね」
ロベルタとアンネマリー嬢の言葉にリンジー嬢が呟いた。多分、普段は目にすることも叶わない高位貴族に対する興味と興奮からの言動だとは思うけれど。
「『イケメン』というのはお顔のよろしい男性の意味ですし、『モテモテ』はたくさんの方に好意を持たれるという意味ですわね。『逆ハーライフ』は……ちょっとよくわかりませんけど、『突入』ということは、自分が令嬢たちに人気の男性たちに好意を持たれるようになる、と言っているのだと思いますわ」
流行のものはなんでも一応嗜んでおく、という勉強熱心なリンジー嬢が意訳してくれた叫びは、なんとも感想の言いづらいものだった。
「相変わらず妙なことにも詳しいわね。それはどんな層が使っている言葉なの？」
「これは平民の女性たちが好む恋物語によく使われている言葉ですわ」
「恋物語」
リンジー嬢の説明に、思わず声が漏れた。
普段の生活とは違い、学園では高位貴族と下位貴族の距離が近くなる。近くなるといっても、対等というわけではない。普段ならば目にすることも叶わない相手と頻繁に顔を合わせ、必要があ

れば言葉を交わすこともある、という程度である。しかしその暗黙の了解を理解しない生徒もいて、問題を起こして学園を去る者も年に数人はいるらしい。

特に今年はエルンスト殿下が入学されるし、ふたつ上には王太子であるカスパル殿下が在学している。そして俺は、面倒なことにエルンスト殿下のご学友、兼護衛として学園生活を送らなければならない。だから、できるだけトラブルは起こってほしくないのが正直なところだ。

「まずは出会いイベントよね！」

声はまだ続く。どうやら相手がいるわけではなさそうなので大きな独り言なのだろう。ますます要注意人物だ。

「エルンストとは校門前でぶつかるっていうベタな出会いなんだよねー。で、婚約者の悪役令嬢に怒られたらエルンストが庇ってくれて、お互いに目が合っちゃって恋が芽生えるの！」

色々と言いたいことはあるけれど、簡単に恋が芽生えすぎではないだろうか？

「エルンストは、本当は公爵家に婿に行かされることが不満なのよね！　弟ってだけで王様になれないなんて酷いわ！　王や王太子に目をつけられないように軽薄に装ってるけど、心の中では真実の愛を求めてるの！」

「……不穏な話かと思ったら愛を求めている、に落ち着いたわね」

アンネマリー嬢の感想を聞きながら、俺は眉間に皺を寄せる。

エルンスト殿下が婿入りを不満に思っているかどうかはさておき、少なくとも王太子の悪意を正面から受け止めないように、意識して軽薄に装っているのは事実だ。しかし、それに気づいているのはごく少数のはずで、誰ともわからない令嬢が知っているようなことではない。チラリとロベルタに視線を送ると、ロベルタも視線だけで頷いた。

「ま、その前に今朝の市でもう出会っちゃったんだから、これってシナリオとは違うけどやっぱり運命よね！」

それを聞いて、俺たちは四人とも目を見張った。

話の流れからエルンスト殿下が朝市にいたということなのか？　護衛の近衛（このえ）は一体何をしてるんだ？

「ロベルタとの出会いは講堂に向かう途中の廊下だったわね。遅刻しそうになって走ってるアタシにロベルタが注意するの！」

俺たちの気持ちなど知るわけもない声の主は、今度はロベルタについて喋り始めた。

「そういう注意をロベルタ様がするとは思えないけど」

「そうだな。僕はそんな面倒なことはしない」

「アルバート様ならしそうですわね」

真顔で面倒だと言い切るロベルタはどうかと思う。廊下を走られると、出合い頭にぶつかって大怪我につながることもある。注意するのは当たり前では？

「そして迷ってしまって入学式に遅刻しそうなアタシをロベルタが講堂まで連れていってくれるのよ！」

「……ロベルタ様らしくないわね」
「なぜ僕が、そんな遅刻しそうな時間にそんな場所をうろつかないといけないんだ？」
「それもロベルタ様らしくないわ」
アンネマリー嬢の指摘はとどまるところを知らない。
「不機嫌な顔しながらも紳士らしくエスコートしてくれるロベルタの胸に、つまずいたアタシが抱きついちゃって胸キュン☆って感じ～？　アタシの柔らかマシュマロおっぱいの感触に赤面しちゃうロベルタ！　きゃー恥ずかしい！」
「女の胸の感触に顔を赤らめるなんて別人ね。ロベルタって女子みたいな名前の男子生徒が他にいたかしら？」
アンネマリー嬢の言うことはもっともではあるんだけど、ロベルタの名前は妹が欲しかったロベルタのお姉さんがつけたものなので、本人は気にしていないけれどあまり指摘しないでやってほしい。
「ロベルタというお名前の令息はホーク侯爵家にしかいらっしゃいませんわ」
俺もそんなロベルタはあり得ないので別のロベルタの可能性を考えてみたけれど、記憶力には定評のあるリンジー嬢にバッサリと否定された。
そして声はまだ続く。
「ロベルタは自分の方が優秀なのに兄が家を継ぐことに不満を持ってるのよ！　それに次期宰相になるためには、自分が仕えてるエルンストが王にならなきゃいけないのに、エルンストは公爵家の婿になるし、そっちにも不満があるのよね！」
それを聞いて思わず首を傾げる。
「あら、ロベルタ様。不穏だわ」
少しからかうような声でリンジー嬢が言う。
「ロベルタ様はリード家へ婿に来るんでしょ？　今更ホーク侯爵家を継ぎたいと言われても困るわ」
アンネマリー嬢は鼻の頭に皺を寄せて、淑女らしくない顔で不満を表明した。
「家を継ぐのも宰相になるのも、アルバートという時間が減るだけで無駄だろう。それに僕はエルンスト殿下なんかに仕えた覚えはないんだけど？」
いささか不敬なロベルタのぼやきにアンネマリー嬢が頷く。
「そうよね。それが私の知るロベルタ様だわ」
「そしてエルンストと仲良しのアタシを焚きつけて、エルンストが婚約破棄するように仕向けるんだけど、いつの間にかアタシの健気さに恋するようになっちゃうの！　自分の野望のためにはアタシとエルンストが結婚しなきゃダメだから、自分の恋心は封印したままアタシたちの仲を後押しするなんて、ロベルタ切ない！」
大声で語られる内容は全く意味がわからない。一体どんな物語がこの令嬢の中で進行しているんだろうか？　それに、公爵令嬢との婚約を破棄したエルンスト殿下が王位に就けるとも思えない。

あまりの馬鹿馬鹿しさに首を振ってしまう。
そんななんとも言えない空気の中、リンジー嬢がいつものおっとりとした声でひとこと言った。
「また恋ですのね」
確かに。また恋だ。
「次はきっとアルバート様ね！」
そう言ったアンネマリー嬢の声は少し弾んでいるので、彼女は謎の声の物語を意外と楽しんでいるようだ。

「そしてアルバートはぁ、今日じゃなくって明日！　エルンストに校門前で悪役令嬢から助けてもらったお礼を言おうと校内を歩いてたら、エルンストがロベルタとアルバートを従えて歩いてくるんだよね！　イケメン二人を従えるイケメン！　さすが王者の風格！」
顔が良ければ王者の風格なのか……？
「そこにアタシが駆け寄ろうとしたら、つまずいちゃってアルバートの胸の中に飛び込んでいっちゃうの！　そしたら、アタシのマシュマロおっぱいが筋肉質なアルバートの胸にむにゅっと押し付けられちゃって、アルバートは真っ赤になっちゃうんだよね！　おっぱいくらいで赤面しちゃうロベルタもアルバートもウブで可愛いし、ロベルタはアタシを抱きとめたアルバートにちょっと嫉妬しちゃうのよね。それを見たエルンストもアタシに興味津々って感じになっちゃうの！　ホント、アタシって罪な女よね！」

エルンスト殿下にぶつかり、つまずいてロベルタに抱きつき、またしてもつまずいて今度は俺に抱きつくとか……、わざとでなければ注意散漫すぎるし運動神経も悪すぎる。この令嬢は大丈夫なのか？
「ロベルタ様が嫉妬、って！　確かにアルバート様に抱きついた女は無事に済みそうにないんだけど！」
「ロベルタ様、さすがに学園が始まって二日で女子学生を処してしまうのは早すぎますわ」
もはや何も言わない方が身のためだというのは言うまでもない。

「それで、アタシを意識するロベルタとアルバートがなんだかギクシャクしちゃうんだけど、まあ仕方がないわよね。これも愛され乙女のアタシの魅力だもの。仕方がないわ」
ロベルタが令嬢を意識するのはエルンスト殿下と令嬢を近づけようとしている時ではなかったのか？　俺は一度胸を押し付けてきただけの粗忽な令嬢を意識するのか？　いや、俺ではないんだが……
「アルバート様、心中お察しいたしますわ」
リンジー嬢の励ましの言葉が心に沁みた。

「アルバートはぁ騎士になるために必死で鍛えた身体が自慢なの！　だから、次に会った時にカッコ良かったよ！　すっごく鍛えてるね！　筋肉スゴイ！　って腕とか胸とかペタペタ触ってボディ

タッチと褒め殺しであっという間に陥落のちょろいキャラだもんねー。惚れさせればこっちのモンよ！　なんでも言うこと聞くワンコの出来上がり！　出来の良いお兄さんに劣等感抱いてて、『身体だけおっきくなったけど剣の腕はまだまだだな。このままじゃ騎士にはなれんぞ！』ってパパに言われたのがトラウマで、必死で身体を鍛えてるんだよね。可哀想！　だから、『大丈夫だよ。こんなに強くて努力してるアルバートは絶対騎士になれるし、将来は近衛にだってなれるし、騎士団長だって夢じゃないわ！』って優しく言ってあげるの。まあ、たまにクッキーとか差し入れしなきゃ好感度下がっちゃうけど、ボディガードにはぴったりだからね！　犬を飼うなら餌もやらないとダメってことだよね！」

えーっと？

「アルバート様は騎士になりたいのですか？」

口の端に笑みを浮かべたリンジー嬢が俺に声をかけてくる。

「いや、全く」

「ミケルセン侯はアルバートの好きにすればいい、と言いつつエルンスト殿下の護衛をさせるほどアルバートの腕を買ってると思うが」

「それは陛下に頼まれたのだから仕方がない」

「いや、ミケルセン侯は実力がなければ断るでしょ、ってことよ」

「それはそうだが……」

「アルバート様にはオールドマン家に入ってもらわないといけないのですから、今更、騎士団長になりたいと言われても困ってしまいますわ」

眉尻を下げて言うリンジー嬢にアンネマリー嬢が言葉を重ねる。

「そうよ。アルバート様の将来はアルバート様だけのものではないのよ？　私たち四人の未来がかかってるんだから！」

アンネマリー嬢の圧が強いけれど、四人の将来が四人それぞれの肩にかかっているのは本当のことだ。

「――というか、『身体だけ大きくなった』って、本当にアルバートのことなのか？」

ロベルタの発言に、女性陣二人の視線が俺の頭から爪先まで走る。

「……背は、高いわね。そこそこ」

「……直接拝見したことはございませんけど、鍛えていらっしゃると言ってもお父上やお兄様のような、力の強そうな筋肉量の多い騎士的な体型ではありませんわね」

「アルバートはミケルセン侯爵夫人によく似たキリッとした美人で、肥大した筋肉はついてないよね？　あの声が言ってるのは別人じゃないのか？」

確かに、『アルバート』は騎士団長の息子であることは同じでも、人物像が全く違う。別人というか、俺たちの名前を使った想像の物語なのかもしれない。

そんなことを考えていると、リンジー嬢がハッとして声を上げた。

「……わたくし、気づいたのですけど」

「どうした？」
「アルバート様には恋がありませんわ」
リンジー嬢が言った。
「確かに、アルバート様は簡単に落とせるとか犬のように言うことを聞く、とは言ってたけど恋には落ちた感じじゃなかったわね」
そう言われればそうだったかもしれない。
「ちなみに『ちょろい』というのは簡単すぎる、という意味ですわ」
「いや、それ本当に侮辱が過ぎるよね？　アルバートをなんだと思ってるんだ？」
低く唸るように言ったロベルタに、リンジー嬢は再び口を開いた。
「入学初日に女子学生を処してしまうのは早すぎますわ」

「そしてサリエルとウリエルはぁ～！」
まだまだ続きそうな勢いだが、いつまでも聞いていては入学式に遅刻してしまう。どうでもいいけれど、あの声の主は大丈夫だろうか？　遅刻ギリギリで廊下を走ってロベルタに怒られる予定らしいが、ロベルタはこのまま俺たちと一緒に講堂に向かうので彼女と出会うことはない。
そもそも、入学式前にこの四阿に集まったのは学園での振る舞いを話し合うためだ。
「私はリンジーと一緒に過ごすわ」
アンネマリー嬢が宣言するけれど、そんなことは言われなくてもわかっている。

「アルバート様はエルンスト殿下の護衛でいらっしゃいますわよね。そうすると、ロベルタ様もエルンスト殿下と同行されるのですか？」
「ああ、そうなるな」
ロベルタが苦虫を噛み潰したような顔で肯定した。よほどエルンスト殿下の側近と見られるのが嫌なのだろう。エルンスト殿下は人を食ったところがあり、俺をつつけばロベルタが反応すると学んでからかってくるから苦手なのだと思う。大抵のことは涼しい顔で受け流すロベルタが、なぜエルンスト殿下が口にする俺絡みの冗談にだけ過剰に反応してしまうのだろうか。なんにせよ、ロベルタは俺と一緒にいるために、相性の悪いエルンスト殿下の側に侍ることも辞さないようだ。
「アルバート様は大丈夫なの？」
「何がだ？」
「エルンスト殿下の護衛なんて、何か起きるに決まってるじゃない。騎士になるわけじゃないにしたって、殿下に何かあればアルバート様の経歴に傷がつくわ」
「今朝も、あの声の主の言うことを信じれば朝市に行っていらしたのですわよね？　朝市は貴族街では行われませんから平民街に行かれたのだと思いますわ」
困ったこと、と言いたげにリンジー嬢が頬に手を当てて小さく首を傾げる。
「それについては」
と、声を上げたのはロベルタだ。
「アルバートが護衛するのは学園内だけ。そして、エルンスト殿下が意図的に護衛のアルバート

を撒いて姿を消した先で起こったことに関しては、責任は問わない、という条件を陛下から頂いてる」

「それに正規の騎士が校内でも護衛についているから、滅多なことは起こらない、と……思いたい」

断言できないのが悲しいところだが、父上と宰相であるホーク侯爵が陛下から言質をとっているので問題ないだろう。

「とにかく、常識の範囲でできることをするだけだ」

そう言い切ると、三人から哀れむような視線を向けられた。

エルンスト殿下はとにかく軽い。

軽薄が服を着て歩いているような人間だ。それが銀髪に紫の瞳という王家の色と王子の肩書を持っているのだから質が悪い。あっちで令嬢にちょっかいをかけ、こっちで簡単に口約束する。どちらも王子のやっていいことではない。

フットワークがとても軽く、気軽に城を抜け出して街で遊んできたりもする。なので、今朝の朝市の話を聞いても嘘だろうと一笑に付せられない実績があるのだ。

そんなエルンスト殿下の婚約が決まったのは十三歳の時だ。

まだ軽薄さの片鱗しか見せていなかった殿下の婿入り先に決まったのは、王都に隣接する広大な領地を持つビショップ公爵家の一人娘だ。王家も公爵家も公爵令嬢も前のめりだったと聞いた。

しかし、婚約が決まった殿下は婚約以前と同じように振る舞った。婚約者であるビショップ公爵令嬢のことはきちんとエスコートするし、丁重に扱っている。けれど、他の令嬢たちに対しても婚約者と同じように丁重に扱うのだ。

女性を丁重に扱うのは悪いことではないが、十五歳になり舞踏会にも参加するようになるとエルンスト殿下の欠点が浮き彫りにされた。婚約者と夜会に出る時にはもちろん、婚約者をエスコートしてファーストダンスも婚約者と踊る。彼女が望めば二曲目も三曲目も軽やかに楽しげに踊っていた。その後、婚約者のビショップ公爵令嬢が離れると、列を成す令嬢たちと片っ端からダンスを踊る。

王子と踊りたいという令嬢はたくさんいるし、王族としてそれに応えるのは悪くない。ただ、手を取り、指先に口づけ、腰を抱き、頬を寄せる、というマナーとして間違っていない行為であるにもかかわらず、殿下がすると過度に親しげに見えてしまう。婚約者が同伴していない時には、婚約前の令嬢に請われてファーストダンスを踊り、そのまま次の曲まで踊ったという話も聞いた。

この国の貴族の常識では、婚約者をエスコートしていない場合は会場までエスコートしてきた相手――大抵は既婚者で血縁の年上の身内――とファーストダンスを踊るのが慣例だ。

ただでさえ目立つ秀麗な殿下が、未婚どころか婚約者もいない社交界にデビューしたばかりの若い令嬢とファーストダンスを踊れば噂になるのは避けられない。令嬢は知らなくても親は社交界の暗黙の了解を理解しているはずなので、令嬢の親も王族であるエルンスト殿下を狙っているのは明らかだ。そして殿下が公爵家に婿入りするというのは誰もが知っているので、愛人の地位を狙っているのだろう。そして殿下もそれを知っていて、愛人など考えてもいないくせに請われた手を取る

のだから質が悪いのだ。
裕福な公爵家に婿入りする第二王子。王子といえども婿入りなのだから第二妃を娶るわけにはいかない。王族は複数の妃を持つことができるけれど貴族はそうではない。その上、婿入りにもかかわらず結婚前から愛人候補が出てくれば、ビショップ公爵令嬢としては面白くないだろう。
エルンスト殿下の方は、請われたから踊っただけ。愛人だなんて考えてもいない、という態度だ。
そしてそれが殿下の本心だと俺とロベルタは知っている。たまに城を抜け出した殿下がミケルセン邸にやってきて愚痴をこぼして行くからだ。お茶を飲みながら貴族に囁かれる噂を笑って否定する。けれど、助言には耳を貸さない。本当に難儀な性格だ。

「それで、僕たちも殿下も特別棟で同じ教室だけど、婚約者としての交流は周りに見せておきたい。殿下の許可が下りれば一緒に昼食をとるのはどうかな？」
「構わないわ」
アンネマリー嬢が即座に返事をした。
「そうですわね。これまでは婚約者を伴って出席するようなこともありませんでしたから、きちんとわたくしたちの関係を見せておくのは大切だと思いますわ」
学園でも爵位は健在だ。
学園の外に比べればゆるくはあるけれど、それでも家の位を無視していいというものではない。伯爵家以上の高位貴族と王族は、それ以外の生徒たちとは異なる『特別棟』と呼ばれる建物で授業

を受ける。これには、各家の財力によって入学までの家庭学習の進行具合が違う、という大きな理由がある。基礎はできていて当たり前。なので学園で学ぶ内容は卒業後の進路によって分けられ、上に立つ者としての心構えや実践的な内容を専門の講師から学ぶことになる。
それ以外の生徒たちは『一般棟』と呼ばれる、特別棟からは離れた場所に建つ別の建物で基礎教科から学び、その中で優秀な者は高位貴族とは別の一般棟の中にある特別クラスで学ぶことになる。成績がいくら良かろうと、身分の低い者が王族や高位貴族と一緒に学ぶことはできない。
ただひとつ例外があって、特別棟での授業についていけない基礎教科から学ぶ必要のある王族や高位貴族は、一般棟で下位貴族や平民と机を並べることになる。
実は、エルンスト殿下の兄で王太子であるカスパル殿下がその例外で、特別棟ではなく一般棟で授業を受けている。せっかくの学園生活なので身分の違う者たちと交流したい、とカスパル殿下はもっともらしい理由をつけているらしいけれど、信じているのは下位貴族の一部や平民だけで、実際には成績が足りていないのだというのが高位貴族の中では暗黙の了解だ。
「ただ、僕たちが君たちと一緒に食事をとると、殿下がビショップ公爵令嬢と昼食を囲まないのが不自然になるんだよね。彼女を誘うのは難しいかな？」
「どうかしら？　誘えば断ることはないと思うわ。内心はわからないけどね。それよりそろそろ移動しない？　まだ何か叫んでるあのヤバそうな女と鉢合わせでもしたら面倒だわ」
アンネマリー嬢の意見にみんな同意だったので、そのまま俺たちはそれぞれの婚約者をエスコートして講堂に向かった。

「そういえば、ロベルタ様は新入生代表の挨拶は辞退なさいましたの？」
「ああ、王族が入学するんだからエルンスト殿下がすればいいと思ってね。成績だって一位じゃないだけで十位以内に入るだろうし」
「……確かにそうですわね。王族が挨拶なさった方がきっと盛り上がりますわ」
その会話を聞きながら、入学式に盛り上がりは必要なのだろうかと自問する。
「エルンスト殿下は見た目もキラキラしてるものね」
そこに加わったアンネマリー嬢は、気難しい相手なら不敬に問われそうなことを平気で言うので心臓に悪い。
「それは僕の見た目じゃ物足りないってことかな？」
アンネマリー嬢をエスコートするロベルタが、緩く波打つ金髪をサラリと流しつつ首を傾けてアンネマリー嬢に視線を合わせ、ことさら甘い声で問う。
「あら、張り合っちゃうの？　申し訳ないけどロベルタ様はエルンスト殿下に比べれば盛り上がらない美形よ」
「盛り上がらない美形……」
褒めているのか貶しているのかわからない表現だ。
「エルンスト殿下は華やかで、ロベルタ様はしっとりと落ち着いているのですわ。比べるようなものではございませんわ」

なるほど、言われてみればそうかもしれない。さすがリンジー嬢だ。
「それを言うなら、アルバートは凛とした美形だね」
ぼんやり話を聞いていたら、いきなり自分に飛び火してきた。ロベルタは、さっきアンネマリー嬢にかけたわざとらしい甘い声とは全く違う、滴るような色気を含んだ甘い声で言って、俺に視線を合わせると蜂蜜色の目を緩ませた。
「確かにアルバート様は凛とした美形よね。花なら白百合って感じ。見た目であだ名をつけるなら氷の騎士？」
「中身を知ってると『氷の騎士』とは思えないけどね」
ロベルタとアンネマリー嬢が楽しそうに話を続け、リンジー嬢はからかうような目でエスコートする俺を覗き込んでくる。
「見た目は氷の騎士だけど、中身は気苦労が多くて面倒見が良い……そうね、中身はウチの家令によく似てるわ」
アンネマリー嬢の言う家令は、リード侯爵家を取り仕切る切れ者の苦み走った中年男性だ。
「アンネマリー嬢のところの家令くらい難題をバッサバッサと解決していけるようになりたいね」
そう軽口を叩くと、俺の腕に手を添えて隣を歩いていたリンジー嬢が「ぜひ期待していますわ」と嘯いた。
リンジー嬢の期待が重いです。

◆◆◆

入学式の席次は、同じ家格の侯爵家でクラスも同じなので、俺とロベルタは最前列で隣になる。同学年に公爵家の子息はいない。ちなみにクラスは同じでも、式典などで席に着く場合は男女別になるので、侯爵家のアンネマリー嬢は通路を挟んだ反対側の最前列に着いている。伯爵家のリンジー嬢と席が離れるのをぐずっていたけれど、リンジー嬢に「式典が終わったら帰りにカフェに行きたいですわ」と言われて、今は自席で始まってもいない式が終わるのを待っている。リンジー嬢にかかればアンネマリー嬢は、先ほどリンジー嬢が説明してくれた言葉を使えば『かなりちょろい』。

「今日は式が終われば昼前には帰れるから、帰りに寄り道しないか？」

少しだけ顔を寄せて、ロベルタが正面を向いたまま囁くように言う。

耳にかけた髪の毛がさらりとこぼれ落ちて俺の肩にかかるのがくすぐったい。

「そうだな。夜は入学祝いのパーティがあるが、それまでに帰れば問題ないと思う」

パーティと言っても、ミケルセン、ホーク、リード、オールドマンの四家の家族が集まって会食するだけのこぢんまりとしたものだ。

「ラプサ伯爵家の植物園に新しい施設ができたらしいんだけど、どうかな？」

「それはちょっと気になるな」

「前評判はかなり良いから、期待しても良いと思うよ」

ロベルタがそう言うならかなり期待できるのだろう。

ラプサ伯爵は領内に膨大な埋蔵量の宝石鉱山を複数所有している桁違いの富豪だ。芸術や美術品をこよなく愛し、若い芸術家たちのパトロンになっている。そして美術館、劇場、植物園などを経営して、予約制でそれを開放し、貴族たちの社交の場にしている。

「ラプサ伯爵には予約の手紙を出しておいたからゆっくり見て回れるよ」

蕩けるように甘い声で囁いてくるロベルタは本当にマメだ。

俺が子供の頃に綺麗だと言った髪の毛を今も伸ばしているし、卒業までは手を出さない、と言いつつもそれ以外で俺と楽しむためなら些細なことまで手を抜かない。好きだということを、他人にはわからないような絶妙な言動で伝えてくる。同性愛が法で禁じられ奇異の目で見られる世間に配慮しながらも、俺にはわかるように愛情を示してくる。

そんなロベルタをとても可愛いと思うし、こんなに愛されていることにいつも感謝している。

「――それは楽しみだ」

なので俺もにっこり笑ってロベルタの耳元に囁き返した。

式が始まる。

学園長の挨拶の後、在校生代表の歓迎の言葉は最終学年の王太子殿下からだ。王族らしい月明かりを集めたような銀糸の髪に、アメジストのような濃い紫色の瞳はやたらとキラキラしていて、講堂内は貴族らしい慎みをもって密やかに盛り上がった。なるほどこれが『盛り上がる美形』か、と

比較対象にされたロベルタを横目で盗み見る。その視線に気づいたロベルタに軽く肘打ちされながらもカスパル殿下の無難な祝辞を聞いた。

そして入れ替わりで新入生代表のエルンスト殿下が壇上に登場した。ロベルタの隣の空席が本来のエルンスト殿下の席だったはずなのに、一体どこに行っていたのだろうか？　今まで気づかなかった自分に呆れながら、早速イレギュラーな動きを見せるエルンスト殿下にため息をついた。

「やあ、みんな！」

緊張感の欠片もなく現れたエルンスト殿下の挨拶は、そんな気の抜けた呼びかけから始まった。髪の毛も瞳の色も王太子殿下と同じような色合いなのに随分と印象が違う。あちらは学力はさておき、立ち居振る舞いは王族らしかった。

「今年入学した僕の同級生たちが、今ここに集まっているわけだけど、以前からの知り合いも初めて会う人も――」

エルンスト殿下がそう話し始めた矢先、何か重たいものを叩きつけるような大きな音がして講堂の扉が開いた。

一斉にみんなの視線がそちらに向かったのは言うまでもない。

「あ～ん、学園が広すぎて迷っちゃったので遅刻しちゃいました～！　てへっ☆」

まず目に入ったのは鮮やかなピンク色の髪の毛。そして、その人物は頭の悪そうな物言いで首を傾げて小さく舌を出した。おそらく可愛らしさを演出しようとしているのだと思うが、失敗しているのではないだろうか。何より、講堂の入口の扉はオークの一枚板を使っていて、あんな勢いで開けられるような重さではない。講堂を使用する時は学園の職員が機械式のカラクリに魔力を送って開閉しているはずだ。

壇上のエルンスト殿下も含めて、誰も何も言わない。突然登場した珍獣に驚いて声も出ない、といった感じだと思う。俺とロベルタも、他の生徒や教師たちと同じように唖然として、派手に登場してきたピンク色の髪の令嬢を見ていた。すると、こちらとバッチリ目が合った。――瞬間。

「あ～っ！　ロベルタってばどうして案内してくれなかったんですかぁ!?　おかげでいっぱい遅刻しちゃったじゃないですかぁ！　っていうか、なんでロベルタ長髪になってるの!?　キャラデザ変わった??　でもまあ、これもなかなか素敵かも」

全くの不意打ちの叫びと共に、バタバタとどうすればそんな音が出るのかと不思議になるような足音を立てながら問題の人物がこちらに向かって走ってくる。

ホーク侯爵令息の知人か？　という囁き声がいくつも聞こえてきて、ロベルタのことなのに俺までなんだかいたたまれない。

「今朝の声だな」

あの時よりも甲高く甘ったるい喋り方になっているけれど、つい先ほど校舎裏の庭園で聞いた声だ。

「ああ、アレだね……」

「さっさと否定しないと面倒臭そうだぞ」

「……そうだな」

ロベルタが派手なため息をついて立ち上がる。
「申し訳ないが君が何者か存じ上げない。お会いしたのも初めてだと思うが――」
ロベルタは近づいてくるピンクの髪の毛の令嬢に向かってではなく、講堂にいる全ての人に聞かせるように、大きくはっきりとした声で相手との関わりを否定した。けれど、それは走ってくる相手には全く伝わらなかったようで、闖入者はまだ話しているロベルタに突進してきてそのままロベルタに飛びつこうとした。
突然の凶行に驚きつつも、相手が勢いよく走ってきていたので念のために準備していた魔力障壁をロベルタの正面に張る。薄青い色はついているけれどその障壁に気づかなかったのか、勢いがつきすぎて止まれなかったのか、顔面から障壁にぶつかったピンクの令嬢は床に尻餅をついて倒れ込んだ。
「痛った～い！　なによコレ！」
ぶつかった障壁をベタベタと右手で触り、左手でぶつけた鼻を押さえて、上目遣いにロベルタを見上げる。そして、その隣に立っている俺に気がついた様子で、俺に視線を合わせて何度も瞬きする。
「……色はアルバートなのにゴリマッチョじゃない？　キャラデザ変わった??　それともバグ？」
不思議そうな顔をしながらも、「まあいいか、ゴリマッチョよりも細マッチョ美人の方が好みだし」などと言いつつ俺に向かって手を差し出してくる。当たり前のように手を引いて彼女を起こすことを期待されている様子だ。だからといってそれに従う理由はないので、念のため障壁を維持したまま講堂の壁際に突っ立っている教師に視線を送る。さっさと片付けろ、の意味を込めたけれど伝わらなかったようで、教師であるどこぞの子爵家の四男は不思議そうに首を傾げてキョロキョロと他の教師の顔を窺っている。
差し出した手を無視している俺にしびれを切らしたのか、まだ床に座り込んだままのピンクの令嬢は小さな子供が駄々をこねるように握った両手を上下に動かしながら、頬を膨らませて叫んだ。
「アルバートってば騎士失格だよぉ！　レディが転んだら手を貸すのは騎士の嗜みでしょ！　そんな風だから騎士団長のパパに見捨てられるんだよ！」
それを聞いた隣のロベルタの纏う空気が変わる。肌に触れる空気がピリピリと電気を帯び始めた。風の魔法を得意とするロベルタは、気持ちが高まると漏れ出た魔力が細かい雷撃となって周囲を威圧する。
そんなロベルタの腕にそっと触れて、俺は全く気にしていない、と目元だけで笑ってみせた。それで落ち着いた様子のロベルタが魔力を収める。同時に肌の表面をパチパチと灼いていた電撃が収束した。
そしてようやく場が収まりかけたところに、面倒臭い茶々を入れてくるのがエルンスト殿下だ。
「おやおや、アルバート。そのお嬢さんの言うことは正論なのでは？　転んでしまったご令嬢に手を差し伸べないのは騎士だけでなく紳士の風上にも置けないよ？」
壇上からからかいつつ、俺だけでなくロベルタも、それ以外の生徒たちの反応もしっかりと確認しているところが抜け目ない。

「お言葉ですが、大声で意味のわからないことを叫びながら男性に飛びかかってくるような人物がご令嬢だとは思いも寄らず。令嬢の外見はしていますが行動は不審者です。令嬢に扮した他国の刺客ということも考えられます。本日は帯剣していなかったため障壁で防御しましたが、剣を持っていれば斬り捨てております」

どんな人間でも暗殺者になりうる。老人でも子供でも。だから護衛は迷ってはいけないのだ。

けれど、どんなに正論で訴えても、屁理屈をこねて言いがかりをつけてくるのはわかっている。

壇上からこちらを見下ろすエルンスト殿下の紫の目が楽しそうに細められた。

「まあ、……確かにあまり見ないタイプの令嬢ではあるよね。そういえば今朝会った時には自己紹介をしなかったけど、僕はエルンスト・リベラ・ランダーハイム。君は？」

講堂の床に座り込んだままのピンクの令嬢にエルンスト殿下が声をかける。その声に反応した令嬢は、俺とロベルタから目を離して首だけグルリと回して、まるで呪いの人形のような動きでエルンスト殿下の立つ壇上を見上げた。

そして、その目にエルンスト殿下を捉えた令嬢は、さっと体勢を整えて身体の向きもエルンスト殿下に向け、胸のあたりで指を組み、満面の笑みで口を開いた。

「わぁ！　エルンスト！　あっ、エルンスト殿下だぁ～！　やっぱりカッコいい！　そういえば自己紹介してなかったですね！　アタシは半年前にピルツァ男爵家の養女になったエマ・ピルツァって言いますぅ～！　今朝は楽しかったですね！」

エルンスト殿下とピンク令嬢のその言葉に、講堂内が騒めいた。何しろ、この非常識な令嬢がエルンスト殿下と既知で、言い直したとはいえ王族の名前を呼び捨てにしたのだ。その上、今朝も会っていたというのだから誰もがどういう関係なのか気になっているのだろう。

これ以上、この二人を喋らせるのはまずい。そう判断した俺がロベルタに目をやると、ロベルタもこちらを向いて頷いた。そして、俺が先ほど視線を送った教師の隣に立つ、騎士科の教師に目配せした。視線を合わせて、顎でピンクの令嬢を示して排除を命じる。ロベルタはこういうのがとても上手い。

その指示を受けた騎士科の教師は慌てて、ピンク色の髪を左右の高い位置で結んだ、ピンク色の幼女が着るようなヒラヒラとボリュームのあるドレス姿の派手で常識のない珍獣のような令嬢を二人がかりで講堂から連れ出した。

大声で喚き続ける声が途中で聞こえなくなったので、きっと教師が魔法で一時的に声を封じたのだと思う。

「エマちゃんかぁ。面白い子だったね」

ピンク令嬢の乱入で中断されていた新入生代表挨拶を、何もなかったようにそつなくこなしたエルンスト殿下が壇上から降りてきて、ロベルタの隣の空席に座る。

「一体何者なんだろうね？　僕のこと知ってたし、君たちのことも知ってるみたいだったけど？」

「エマ・ピルツァという名前と、養女だと言っていたのでピルツァ男爵が最近引き取ったという市井育ちの妾の娘でしょうね」

ロベルタは興味なさげだけれど、それでも情報はしっかりと入手していたらしく殿下に伝える。多分、殿下に情報を提供しているように見せて俺にも伝えてくれているのだろう。

「へぇ、だからあんな風なのかな？」

楽しげに目を輝かせる殿下に嫌な予感しかしない。

「……俺の知る平民は、貴族と自分たちの違いをしっかりと理解していて、不敬を働けばどうなるかを知っているので突然駆け寄ったりはしません。貴族にしたって同じようなものです。王族に許しもなく近づく者は、ましてや駆け寄ったりすれば即座に不審者として斬り捨てられます。それを知っているからあんな行動を取る平民も貴族もいません」

先ほどと同じことを繰り返して理解を求めようとしたけれど、それはなかなかに難しい。

「でもね、アルバート。令嬢を斬ったりするのはダメだよ？　騎士は淑女を守るものだろう？」

目を三日月のように細めて、子供に言い聞かせるような口調で笑いながら言う殿下はわかっているのだ。自分の言葉には大した意味がないことを。

エルンスト殿下の護衛として学園に通う俺は、殿下に危害が及ぶ可能性があれば攻撃することを許されている。とはいえ、俺は防御系の魔法も得意なので相手を傷つけずに護衛対象を守るのは簡単だ。それもあって、陛下は俺をエルンスト殿下の護衛にしたのだろうし、父もそれを許可したのだろう。

だからと言って、非常時に手段を選んではいられない。

「それはお約束しかねます。俺はエルンスト殿下の護衛であって騎士ではありませんから」

そう言うと、殿下はわざとらしく眉尻を下げて悲しそうな顔を作る。

「うーん、アルバートには僕の専属護衛騎士になってほしいんだけどなぁ」

殿下は俺ではなくロベルタに向かって、何度目かになる不毛な誘いを口にした。そんな風だから、殿下の口から出る言葉は本気なのか冗談なのかわからないのだ。

◆　◆　◆

入学式が終わると他に行事はなく、俺は護衛としてエルンスト殿下を王宮からの迎えの護衛騎士に引き継いで、馬車に乗るのを確認した。そこまでが俺の役割で、それを妨害するような入学式に現れた妙な令嬢も姿を見せなかったので、何事もなく今日の役目から解放された。

「これから三年は長すぎる……」

王族なので最初に講堂を退出し、誰かに声をかけられる隙を作らせず馬車寄せの目立つ場所に停められた殿下の馬車に直行したので、今日は何も起こらなかった。けれど明日からは違う。殿下は自由に学園内を歩き回りトラブルに首を突っ込んだり、自らトラブルを引き起こしたりするだろう。

「まあ、僕もついてるし、なんとかなるだろ」

そう言って慰めてくれるロベルタも疲れ気味だ。

「ラプサ伯爵の植物園に連れて行ってくれるんだろう？」

そんなロベルタの気持ちを引き上げるように声をかけると、琥珀色の瞳に光が戻った。
「ああ、アンネマリー嬢とリンジー嬢にも声をかけてるよ。さすがに有名なデートスポットに婚約者を連れて行かないのは不自然だからね。でも中では自由行動になるから彼女たちも二人で楽しむでしょ？」
「なるほど」
相変わらず細かいところまで隙がない。そんなロベルタの調整能力によって、俺たち四人は完璧な親友同士で仲の良い婚約者に見えている。それはアンネマリー嬢の父親のリード侯爵やリンジー嬢の父親のオールドマン伯爵から折に触れて感謝の言葉を貰うほどで、俺の両親やホーク侯爵夫妻も満足げにしている姿からも窺える。
「あんなにアルバートと結婚するんだ！　って言ってたのに、ちゃんと婚約者と仲良くしているみたいで安心したわ」
と、俺の母上とロベルタの母上がお茶を飲みながら話しているのを聞いてしまった時は、なんとも言えない気分になったけれど、自分たちの両親まで欺けているということは、俺たち四人の関係が上手くいっているということなので安心ではある。

馬車寄せでそれぞれの婚約者を待っていると、リンジー嬢とアンネマリー嬢がエルンスト殿下の婚約者であるミーシャ・ビショップ公爵令嬢と共に現れた。その姿に、入学式後に急いで馬車に押し込む前に、婚約者との時間を提案するべきだったかと反省する。とはいえ、それは護衛の仕事ではないので責任を感じるのもおかしな話だ。
そんなことを考えているとビショップ公爵令嬢に声をかけられた。
「ミケルセン侯爵令息、殿下がお世話になりますわ。問題を起こす前に馬車に乗せてくださった手腕に感心いたしました」
背筋をピンと伸ばし、真っ直ぐな癖のない黒髪に、正面から逸らさず見つめてくるヘイゼルの瞳は気が強く高圧的に見えるけれど、実際は礼儀正しい常識的な令嬢だ。
「お褒めいただき光栄です。俺のことはアルバートとお呼びください」
初対面ではないけれど、親しく話をするほどの仲ではなかったビショップ公爵令嬢とは、学園で毎日会うことになるし関わることも増えるだろう。そう思って名前で呼んでもらうようにお願いする。このあたりのさじ加減は感覚的なものなので、いつ誰に名前で呼ぶことを許すか、というのは第三者からの印象も左右する重要なことだ。
「それでは私のこともミーシャと。ホーク侯爵令息も同じようにお願いしますわ」
「それでは僕のことはロベルタとお呼びください」
挨拶も終わったところで、アンネマリー嬢がミーシャ嬢をこれからの予定に誘った。
「お時間が許すようでしたらミーシャ様もラプサ伯爵の植物園にご一緒しませんか？　新しい施設ができたらしくて、ロベルタ様が予約を取ってくださったので、私たちこれから参りますの。いかがかしら？」
「まぁ！　……でも、婚約者同士の交流なのではなくて？」

ミーシャ嬢は興味があるけれど遠慮も感じているようで、ロベルタと俺に視線を向ける。
おそらくミーシャ嬢にとって婚約者との交流の時間というのは、王宮で限られた時間お茶を飲みながら話をするもので、第三者が入るのは不調法だというイメージなのだろう。確かに、王宮での婚約者同士のお茶会に第三者が入り込むのは不調法だ。しかし、今回は二組の婚約者とはいえ、実際には二組の親友同士が遊びに出かけるようなものだった。ミーシャ嬢が同道したからといって全く支障はない。
「気になさるようなことはありませんよ。婚約者の交流というよりも気の合う友人の集まりのようなものだと思っていただければ。これから三年間、共に学園で学ぶ仲間になるのですから。ミーシャ嬢も我々と友人になっていただけませんか？」
代表するように答えたロベルタも俺と同じ考えだったようで、それを聞いたミーシャ嬢も納得した。こうしてミーシャ嬢も伴い男女で馬車を分けて、俺たちは五人でラプサ伯爵の植物園に向かった。

「ホーク侯爵令息、ミケルセン侯爵令息、ようこそいらっしゃいました」
にこやかに現れたのはラプサ伯爵本人だった。ハニーブロンドにヘイゼルの瞳、少しふくよかで人当たりの良さそうな中年の貴族は、高位貴族の子息令嬢を迎えるのに相応(ふさわ)しい身なりで、当主に対するものではない略式の礼をもって迎えてくれた。
「ビショップ公爵令嬢、リード侯爵令嬢、オールドマン伯爵令嬢も、ようこそいらっしゃいました。本日は貸し切りになっておりますので、どうぞご自由にお楽しみください」
自然と令嬢たちは三人で行動することになり、俺とロベルタが二人で行動することになった。おそらく婚約者二組に一人ミーシャ嬢が加わるのでは気を遣わせることになるだろうと、リンジー嬢あたりが考えたのだと思う。
令嬢たちには女性の案内役がつき、俺たちにはラプサ伯爵がついて案内してくれる。こちらの方が爵位は上だとはいえ、相手は当主でこちらは後継ではない次男なので少し申し訳ない気もするけれど、伯爵はこんな風に来場者の案内をするのが楽しみらしいのでありがたく受けることにした。ラプサ伯爵は押し出しが良いわけではないけれど決して卑屈ではない、とても感じの良い案内役として庭園を案内してくれた。
早春の庭は、まだ花の種類はそう多くない。
綺麗に刈り込まれた植え込みの迷路があると思えば、整然とした薔薇園もあり、様々な色合いの新芽が出ている。ピンクの花弁がはらはらと落ちる大木はアーモンドだそうだ。似たような花の咲いている少し離れた場所にある木はりんごで、どちらも同じ薔薇の仲間なのだという。
「薔薇といえば鑑賞のための花というイメージだが、その仲間のりんごはあんなに大きな木になって実を食べるし、アーモンドは種を食べているということだろうか……」
独り言のようにこぼすと、伯爵が楽しげに目を細めて頷く。

「アーモンドの果肉はとても薄くて種が大きいのです。そしてその種の中にある核の部分を食べているのですよ」
「手がかかっているのだな」
「ええ、先人たちは今のように食料が豊富でない時代に、様々な食べられるものを探したのでしょうね」
そういう話をするのが好きなのだろう。楽しげに説明してくれる姿は教師っぽくもある。
その先にある池のほとりには白い水仙が広がっていて、水面には睡蓮の葉が少しだけ浮いている。季節になればたくさんの睡蓮の花が咲くのだろう。巨大なガラス張りの温室もあり、そこには見たことのない植物がたくさんあって異国情緒に溢れている。ロベルタも興味深そうに不思議な形の棘の生えた植物を眺めていた。

「そういえば、新しい施設ができたと小耳に挟みました」
庭園をひと通り回ったところでロベルタが伯爵に声をかけた。もともとはそれを目当てに来たようなものだ。伯爵はロベルタの言葉にパッと表情を明るくして、その後少し困ったように眉尻を下げた。こんなに表情の明け透けな貴族は珍しいけれど、ラプサ伯爵は貴族たちの腹芸とは関係のない世界で生きているのでそれで構わないのだろう。――もしくは、この明け透けな表情自体が相手の警戒を解くためのものなのかもしれない。
「そうなのです！　新しい施設は海の生き物を展示していまして、癒しの空間にしたいと思っているのですが……」
ということは、それが叶っていないのだろうか？
「内装がまだ完成しておらず、高位貴族の方にお見せするにはいささか雑然としておりまして……」
申し訳ないという気持ちと、でも見てもらいたいという気持ちがせめぎ合っているのが伝わってきて、少し微笑ましくなってしまう。そう思わせるのもラプサ伯爵の処世術なのだろう。
ラプサ伯爵家は王家に匹敵するほどの財産を持つ家だ。
陞爵を辞退して、王家に寄進し、教会や孤児院にも多額の寄付をしていると聞く。そして、劇場や美術館や植物園を造り、貴族に限るとはいえ公開して娯楽と社交の場を提供し、他にも新人の芸術家をパトロンとして支援したり、領地の経営が厳しく学園に入学するのが難しい見所がある下位貴族の子供たちに奨学金を出して進学させたりと、様々な分野で社会貢献をしている。
誰の味方もせず中立で、高位の相手に媚びへつらうわけでもない。持っているだけで妬む者がいる中で、敵を作らない立ち回りができるのはかなり頭が良くないと不可能だ。だから、ラプサ伯爵が見た目通りの人物でないのは、貴族として当然のことなのだ。
「伯爵、僕らは侯爵家の子弟ではありますが後継ではないし、デビュタントを済ませたとはいえ、まだ学園に入学したばかりで社会的には子供です。それに、……準備中の施設ということは僕らが初めての客になるわけですよね？　それはちょっと、いや、とてもワクワクします。な？　アルバート」
ロベルタの楽しそうな問いかけに頷いて答える。

「ラプサ伯爵。美しいものを完璧なしつらえで提供したいというあなたの気持ちは理解しているつもりだが、『海の生き物の癒しの空間』などという興味をそそる展示を目の前にぶら下げられた、好奇心旺盛な我々の気持ちも慮ってもらえると嬉しい」

ラプサ伯爵の申し訳ないという部分を軽くして、見せたいという気持ちを後押しすると、伯爵は嬉しそうに笑って少し大袈裟なお辞儀を披露し、ことさら慇懃な態度で俺たちを石造りの薄暗い建物に案内してくれた。

窓のない石造りの建物はひんやりとした広い空間になっていて、魔導灯に照らされた太い水柱が何本も並び、それが薄暗い室内で浮かび上がって見える。そしてその水柱の中には、ふわふわと大きな傘に長い触手を揺らす半透明な生き物が漂っていた。

「これは……」

初めて見る生き物に思わず声が漏れる。

「スライムに似ているが魔獣ではないのか？」

「ええ、それは海に生息する生き物でクラゲというものだそうです。種類によっては触手に毒のあるものもいますが、こうしてガラスの水槽に入れていれば危険はないのですよ」

ラプサ伯爵がクラゲを見る視線はとても穏やかで、愛情を持っているのだと伝わってくる。

「暗い部屋の中で灯りに照らされたクラゲがゆらゆらと揺れている姿を見ていると、世の面倒事など些事に思えて心が安らぐのです」

魔導灯に照らされたクラゲはゆらゆらと水中を漂い、確かに見ているとのんびりとした気持ちになる。

「よろしければこちらにお茶の用意をさせますが」

内装が完成していないというだけあって、床は床材がむき出しのまま絨毯もなく、壁紙も貼られず石壁のままだ。ソファなどの家具もなく、無機質な印象は否めないけれど、クラゲの浮かぶ水柱が何本も並ぶ景色はなかなかに幻想的で俺としては悪くない印象だ。

「ああ、ありがたい。この幻想的な空間で茶を飲めるのは他ではできない体験だね。令嬢たちにも声をかけてもらえないか？」

ロベルタの言葉にラプサ伯爵は入口付近に控えていた侍従を呼んで指示を出した。

◆　◆　◆

「こちらでお茶をいただけるようですわ。素敵なお庭をたくさん歩いたからわたくし、ちょうど喉が渇いていましたの。お二人もいらっしゃいません？」

明るい庭から暗く内装も整っていない室内に招かれて、腰が引けた様子のミーシャ嬢を庇うようにアンネマリー嬢がまだ入口付近に立っているのに対して、リンジー嬢は好奇心いっぱいに室内を見回しながら俺とロベルタの座るテーブルにやってきた。立ち上がってリンジー嬢の椅子を引くと、腰を下ろしたリンジー嬢はテーブルの近くの水柱を興味深そうに眺めてから、未だ室内に入ってこない二人に声をかけた。

当たり前のように普段と変わらないリンジー嬢に拍子抜けした様子の二人も、戸惑うような足取りではあるけれどやってきて空いた席に座る。

そして、しみじみといった風情であたりを見回す。

「私、このような展示物……、動物なのかしら？　初めて見ましたわ。最初はなんだか不気味に感じましたけど、慣れてくると可愛らしく感じますわね」

そう言って、微笑みながらクラゲを見ているミーシャ嬢は少し感性が変わっているのかもしれない。リンジー嬢に目をやると、曖昧に笑って首を振った。彼女にもミーシャ嬢の感性はわからないらしい。

「今日は春先で日差しも穏やかでしたけど、それでも歩き回ると少し汗ばみますもの。ここはひと休みするのにとてもいいわ。石造りで窓もないから夏場も涼しそうだもの。完成したらカフェのように座ってお茶の飲めるスペースになるのかしら？　ぜひとも家族やお友達を誘って驚かせてみたいわ」

リンジー嬢はクラゲも含めた、この建物自体を気に入ったようだ。

「海の生き物を生きたまま王都まで運ぶなんて、さすがラプサ伯爵家ね。リード侯爵領の魚介を王都まで新鮮なまま運べれば王都でも新鮮な魚が食べられるようになるんだけど、ラプサ伯爵はどんな方法でこれだけの海水と生き物を運んだのかしら？」

アンネマリー嬢は他の二人とは全く視点が違う。

「確かに、生きたまま海の魚が運べれば大きな商機だと思うけど、商売としては成り立たないだろうな。ラプサ伯爵は趣味人だから、このクラゲたちも利益を度外視して運び込まれたんじゃないか？」

「そうか……。そうよね」

残念そうに頷くアンネマリー嬢と、その顔を面白そうに見ているロベルタの相性は悪くない。おそらく興味の対象に似たものがあるのだろう。

「アルバート様もご家族をお誘いになられますの？」

ぼんやりと淡く光るクラゲを見ていたら、ミーシャ嬢にそう声をかけられて苦笑する。

「自分の家族は美しいものを鑑賞するよりも身体を鍛えるのを優先する人たちですから。……母は、話を聞けば来たがるかもしれませんね。兄の婚約者やリンジー嬢を誘って」

「アルバート様のお母様とリンジー嬢は仲がよろしいんですの？」

そう言ったミーシャ嬢の声には少し羨望の色が乗っていた。ミーシャ嬢の婚約者であるエルンスト殿下の母である王妃は数年前に亡くなっているので、義理の母との交流に憧れがあるのかもしれない。

「アルバート様のお母様は、お子様が男子ばかりで女の子との交流に飢えていらっしゃるのですわ。見た目は社交界の華、理想の淑女と言われているのですけど、お家ではとてもお強いのです。わたくしにも、淑女たるもの自らの身を守る術を持つべきです、と言って護身術を教えてくださるのですけれど……初めの頃は筋肉痛や打ち身で身体が痛くて動けなくて、『これが噂に聞く姑の洗礼というものなのかしら？』と思ったものですわ」

相変わらずおっとりとした口調で、将来の姑――といっても彼女はミケルセンに嫁入りするわけではないので正確には違う――との仲を聞かされたミーシャ嬢は何度か瞬きして、「そうですの……」と、瞳を戸惑いに揺らしながら呟いた。

「リンジー嬢、もし無理をしているようならやめてしまっても構わない。もともとうちの家族が他家とは変わっているだけだからね」

「いいえ？　わたくしとても楽しんでいますの。できなかったことができるようになるのは達成感がありますし、乗馬も教えていただきましたから遠乗りにも行けるようになりましたし」

頬に手を当てて、ほぅと息を吐きつつ幸せそうに言うその遠乗りの相手が、リンジー嬢と一緒に乗馬の訓練を受けているアンネマリー嬢であることは言うまでもない。

「まあ、リンジー様は乗馬もなさるのですか？」

ミーシャ嬢が驚いて声を上げる。騎乗する貴族女性は、騎士を希望するごく少数の下位貴族の次女三女くらいしか見かけないので、高位貴族の後継であるリンジー嬢がそれを行うことにはとても驚いただろう。

「ええ、わたくしの領地は軍馬の産地ですから。……とはいえ、ミケルセンのお義母様に教えていただくまでは乗馬の経験はなかったのですけれど、有事の際に自ら馬に乗れればその分護衛の負担は減りますし、領地の視察も馬車が通れない道などもありますから、そういう場所で男性騎士と相乗りしなくていいのは気が楽ですわ。それに何より、馬で風を切って走るのはとても気持ちがいいのです」

立ち読みサンプルはここまで

柔らかそうな栗色の髪の毛を揺らして、空色の目を柔らかく緩める姿だけ見れば、まさか護身術や乗馬の話をしているとは思わないだろう。ふわふわと綿菓子のように見えて、リンジー嬢は頭も切れるしなかなかの行動派なのだ。

「私、リンジー様はおっとりしていて大人しい方だと思っていたので、少し意外ですわ」

そう言ったミーシャ嬢の意見が大半の感想だろう。

「うふふ。普段はのんびりしておりますけど、何か起こった時に何もできなくて足手纏いになるのでは伯爵家を継ぐ者として情けないですもの。学ぶ機会をいただいたからには無駄にしたくないのですわ」

リンジー嬢は相変わらずののんびりとした口調ながらも、その内容は気骨がある。そういう彼女だから、安心して秘密を共有することができるのだ。

「そう、ですね。婿が来るからといって全てを婿に任せるのは少し違うのかもしれません。エルンスト殿下は王族ですけど、私の領地なのだから私が治めなければいけないのですよね。……なんだか目が覚めたような気がします」

そう言って顔を上げたミーシャ嬢の目は、これまでよりも強い意志を持ってしっかりとして見える。どうやら何か覚醒したらしい。

「ねぇ、リンジー様。私も馬に乗って自分の領地を見回ってみたいわ！　それに、領主教育はどのようなことを学んでいらっしゃるの？」

そう言って、いきなりリンジー嬢の両手を両手で包み込むように握るミーシャ嬢は、今までの